

1 中期学校経営方針

(1) 学校経営中期取組目標

学校経営中期取組目標
<p>○児童一人ひとりが、自分だけでなく、周りとのかかわりを大切にしながら共に生きようとする子どもを育てる。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教科の楽しさや知的好奇心の幅を広げ、主体的に学ぼうとする子どもを育てる。 ・自己肯定感を高め、自分以外の人や地域とのかかわりを大事にしようとする子どもを育てる。 ・安全、安心な学校生活が送れるように、体力の保持増進や心身の健康を保てる子どもを育てる。 ・多様な交流活動、グループ学習を充実させ、対話を充実させた豊かな人間関係が築ける子どもを育てる。 ・人権教育を充実させ、人の心の痛みがわかる子どもを育てる。

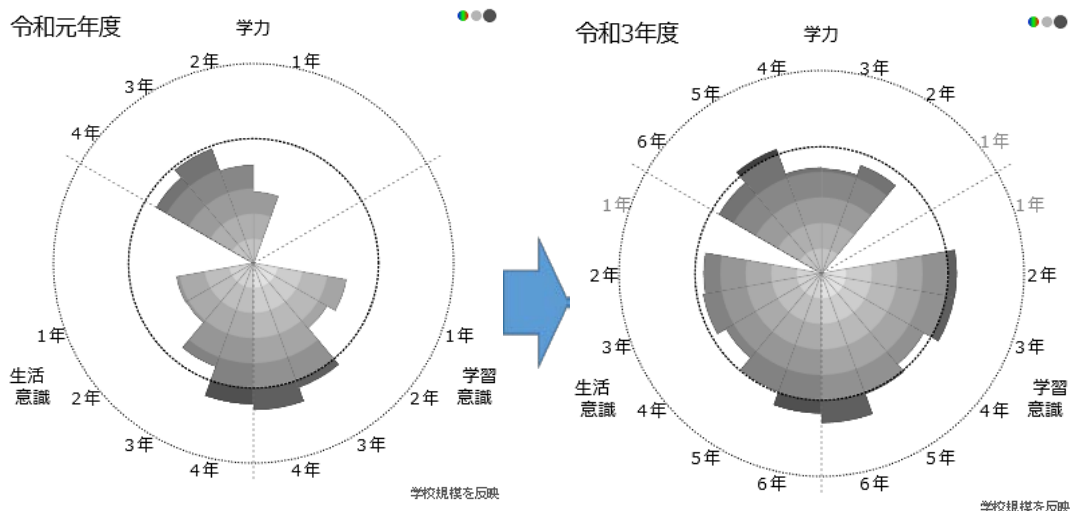
(2) 学力向上に向けた重点取組分野・取組目標・具体的取組

	重点取組分野	取組目標	具体的取組
	生きて働く知	新学習指導要領に対応する主体的・対話的で深い学びによる資質・能力の育成、生活・総合的な学習から得る生きた学びを活かす学習活動を実践する。	○落ち着いた教室づくりから始める。 ○少人数・T・T・教科担任制・取り出しなど授業形態を工夫し、基礎基本の定着を図る。 ○小さな向上を見落とさず励まし、学習への意欲を維持できるようにする。 ○学び合いや話し合いを通して、主体的・対話的に学ぶ学習活動を取り入れる。
担当	教務部		

2 横浜市学力学習状況調査等からの実態把握

(1) 学力の概要と要因の分析

学年に偏りが見られるが、全体的には市の平均的な学力に近づきつつある。学習意識においては高まってきている状況にあるが、学力は市の平均を下回っている。学力の基礎基本の充実を図り、学力の底上げをしながら、どの子もわかる楽しさを味わえる授業や子ども一人ひとりが主体的・対話的に学ぶことができる授業づくりが全学年通して求められている。また、家庭との連携を図り、低学年から基礎的な読み書き計算の習得が行われるよう啓発していくことが必要である。□



(2) 経年変化の状況と要因の分析（学習・生活意識調査も含めて分析）

全体的に、学習意識・生活意識も令和元年度と比較すると、向上が見られる。学習意識・生活意識は市平均を上回る学年も見られる。市平均を下回る設問もいくつかあった。「自分のことが好きですか。」という設問では、全体の22.5%の児童に低い傾向が見られ、「しっぴいするとやる気がなくなってしまうことがありますか。」の設問に全体の70%の児童が低い傾向があった。

これらの結果において、自己肯定感が低い本校児童の実態が分かった。よって、失敗しても安心できる学級づくりや一人ひとりの良さを生かせる環境づくりが大切だと考えられる。加えて担任だけでなく、学年・学校全体で子どもを見守り励ます体制をつくっていくことや、わかりやすい授業を行うことにより、児童が自分に自信をもち、自己肯定感が高まるような教育活動に取り組んでいくことが必要である。また、生活科・総合的な学習の時間を中心に、どの教科でも子どもたちが、主体的に課題に取り組むことができるよう、一人ひとりが自分の考えをもち、友達と考えを共有し学び合う楽しさを味わうことができる授業づくりを行うことも必要である、そのためには、子どもがわくわくするような教材との出会い、活動の場の工夫をすることが不可欠である。加えて家庭学習との関連を深めながら、学びの定着を図ることが必要である。

1 学年

- 文字の練習、計算問題の練習などの復習問題にもくり返し取り組み、学力の基礎の定着を目指す。
- 家庭学習では、既習の問題に取り組めるように、内容を工夫する。
- 学校生活に慣れることができるように、レクリエーションの場をもったり、学校の約束を確認したり、学年で連携して指導を行うようにする。

2 学年

- 自分が考えたことや出来事を日記に書く活動を通して、日常的な語彙力を高める。
- 日々の宿題を通して家庭との連携を図り、学力の基礎基本を確立させる。
- 挨拶や学校での約束などを学年で連携して指導を行い、生活意識を高める。

3 学年

- 毎日の宿題で、漢字を中心とした国語、計算や既習内容のふり返り等の算数、音読など、学習の進度に合わせた内容に繰り返し取り組むことで、基礎的・基本的な学習内容の定着に努める。
- 言葉を基にした読解力の向上を目指し、日常的な言葉の習得と読み取りに努める。
- 数の概念をしっかりにとらえることができるように、数直線や図などを用いて、学習内容を理解できるようにする。

4 学年

- 基礎基本の定着を図るため、毎日の“すくすくタイム”で計算、漢字の反復練習をしたり、宿題で定着を図ったりする。
- 学習に前向きに取り組むことができるよう、総合“ふたば”では子どもたちのつぶやき、気づきを大切に、単元を進める。
- 「何のためにこの学習をしているのか」学習の意味を考えさせ、主体的に取り組むことができるようにする。

5 学年

- 算数を中心に複数体制（ティームティーチング）で指導に当たることで、基礎・基本的な学習内容の定着を目指す。
- 教科担任制を取り入れることで、児童の学習に対する意欲を高める。例えば、図工や理科では、具体物を使いながら、わかりやすく、興味・関心が高まるようにする。
- 情報機器を活用することで、学習に対する意欲を高め、同時に情報活用能力を高める。
- 家庭学習を工夫し、復習を十分に行うようにすることで、学力の向上を目指す。

6 学年

- 自らが学習課題を設定し、課題の解決に向けて真剣に本気で取り組めるように指導する。
- 教科担任制を取り入れることで、学級担任ではなく、学年担任という視点から学年の児童への支援が行き渡る。
- 目的や意図に応じ、考えたことや伝えたいことなどについての的確に話したり、相手の意図をつかみながら聞いたりする活動を大切にする。
- 関連付けたり、分類・整理したり、多面的に考えたりする学習と振り返りを計画的に位置づける。

個別支援学級

- 一人ひとりの発達段階に応じた適切なコミュニケーション手段を積極的に活用する場を位置付ける。
- 子どもの発達段階に応じて、各学年の取組を参考にし、必要な取組を行う。
- 子どもに応じた分かりやすい情報発信をするなど、言語環境の整備を行う。